
線香花火のあとで

立花慎菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

線香花火のあとで

【Zマーク】

Z8563G

【作者名】

立花慎菜

【あらすじ】

いつも他人に流されてしまう七華。七華はずっと意志の弱さに悩んでいた。けれど、そんな七華が本気で人に恋をした。切なく、胸が張り裂けそうなこの想いは七華自身の意志だった…。

プロローグ

「七華、どうしたの？こんな季節に急に花火やりたいなんて言って…」

「…」「どーしても急に花火がやりたくなったの…」

「まあ、良いんだけど…」

「久々でしょ！ほらー！」「これ持つて！」

「何？これ、北極海の花？」

「どーゆー花火なんだろう。ってかそのネーミングセンス、ヤバイよね」

12月18日。

私は近所に住んでいる友人を呼びだした。
今日だけは、笑いたかった。
すべてを忘れて笑いたかった。

もし、今日、友人が一緒にいてくれなかつたら
私は死んでいたと思う。

「七華さー」

「うん~？つてか、その花火ただ青いだけじゃん！！」

「青いから北極海なんじやない？」

「てか北極海つて青いの？」

「知らないよー、海だからでしょ

「北極つて白じゃん？」

「知らないって、ねえ七華

「何~？」

「この一年、どうしてたの？」

「あつー！その花火、白くなつた！凄い、白と青…北極海だーー！」

「七華。話、はぐらかさないでよ」

「何が？ねね、これもやろーよー萌える鬪魂ー！」

「何それ、絶対赤色でしょ！」

「いやー萌えるだから、ピンクかもよーやつてみよー！」

「…七華。」

「ああああー赤だつたーー！」

とにかくがむしゃらに笑つた。

こんなに笑つたのは、久し振りだつたと思う。
本当は、笑いたくなかった。

ずっと永遠に、笑顔なんて失いたかつた。

だけど、今日だけは、今日だけは

笑わざにはいられなくて

一人でなんかいられなくて

泣きたかつた。

「七華ー！」

「…どうしたの？ゆっちゃん。もっと笑おーよー」

「…私は一年待つたよ。そろそろ教えてくれても良いんじゃない？」

「…」

「一人で抱えるのは、辞めようよ」

「何言つてるのー？抱えてなんかないよー！」

「今日、私を呼んだのは聞いてほしいことがあるから、でしょ？」「違つつて、何にもないよ」

嘘。

本当は聞いてほしかつた。ずっと。
誰かに支えて欲しかつた…。

「ね～ゅつちやん、線香花火しよ

「…良いよ。」

だけど、言えなかつた。

どうしても、言えなかつた。

言つてしまつたら、泣いてしまうから。

泣いてしまつたら、前に進まなきやうになくなるから
前に進みたくないつた。

私は、立ち止まつていたかつた。

それでも、誰かに聞いてほしかつた。

この日は、聞いてほしかつた。

「線香花火つて、どうじてパチパチしてゐのかなあ？」

「……七華。」

「ねえ、どうしてパチパチしてゐの……？」

「七華」

「ねえ……どうして？どうして線香花火は、すぐには落ちるの？」

「七……」

「どうして？」

「七華！何があつたの？」の一年、

火の玉と一緒に、
私の涙も落ちた。

「…………聞いてくれる？ゆつちやん」

「うん……うん。」

前へ進もう、

涙を流して、前へ…。

桜のない入学式

「以上200名の入学を許可します。」

教頭先生らしき先生の一言で私は高校生になつた。
桜は前日の大雨でほとんど散つてしまつていた雨上がりの入学式。
そして真新しい制服、通学カバン、初めて履いたローファーが
私が確かに高校生という新しい立場になつたんだと教えてくれた。
その事実が少しくすぐつた。

「続いて、教員紹介。」

その一言でたくさんの先生たちが舞台の上に登壇した。
綺麗な列を作つてビシッと立つ先生たち。
何もかもが新しくて新鮮で、希望に満ちていた。

「右から教務主任、辻村夏樹先生つじむらなつき」

たくさんのお手が鳴り響く。

それに合わせて私の胸も高鳴る。

（楽しい学校生活が送れると良いな…）

「それでは1組から担任の先生の指示に従つて教室へ戻つてください」

会場からは緊張の糸が切れたのか、安堵の溜息が聞こえた。

そして少しずつ、雑談の声が大きくなる。

私は周りを見渡して、誰かに声をかけようと思った。

（始めて声をかける人が、この先の学校生活を決めるポイントになるよね）

「ねえねえ、名前なんて言うの？」

誰に声をかけるべきか悩んでいたと、後ろから声がした。

声がする方を見ると、

ショートカットで明るそうな女の子が立っていた。

どうやら私は先を越されてしまったようだ。

「あ、私、すずむらひなな鈴村七華」

「私は西田柚季。中学ではゆつちゃんって呼ばれてたから、ゆつち

ゃんで良いよ！」

「あ、私特にニシクネームとかないから、七華で良いよ」

「オッケー！ねえ、うちはじの担任の太田先生、結構若くて可愛いよね

」

「うん。女の先生なんて私初めてだよ～！」

「だよね～私も初めて。」

私は、ゆつちゃんと二人で教室まで帰った。

ゆつちゃんは本当に明るくて、話し上手。

だから、凄く話しかけやすかつた。

「でも、よかつたー友達出来て。」

「だよね～入学式つて本当に不安。」

「そうそう～早く誰かに話しかけなきやつて焦るよね」

「うん！」

「これであとは、カッコイイ彼を見つけるのみ！」

ゆつちゃんは、そう言つなり周りの男の子を見回して品定めをした
しばらく眺めてから、私の腕をつかんで指をさした

「の人、結構カッコイイかも！」

その先を見ると、背が高くていかにも運動できます！という感じ
のする男の子がいた。

顔は、普通だった。

「ホラ！笑つた顔なんか超素敵じゃん？」

「そうかな…。私の趣味ではないかも…。」

「えーでも、それならライバルになる心配はないね～！ちなみに、

七華はお旦当ての人いるの？」

爽やかな男の子

私は、周りを見た。

カッコ良い人を探して。

「うん…特に、いない、かなあ…。」

「え？ いないのぉ？」

ゆつちゃんは、本当につまらなそうな声をあげた。

その声を聞いた私は焦りを感じた。

ここで、もし友達を失つたら。

もし、嫌われたら。

私はこの高校生活を楽しく送ることが
できなくなるだろ？と思つたからだ。

「あ…あの人、素敵、かも」

「え！？ どれどれ～？」

「あの人、あの一番前の席の人。」

とにかく誰でもよかつた。

ちょっとだけカッコイイ感じの人を見つけて指差した。

「あ～あの、今立つた人？」

「うん。」

「あの人なら、同中だよ？ 紹介しようか？」

選択ミスをしたと思った。

まさか、誰でもいいから指差した人がゆつちゃんの知り合いだつ
たなんて…。

ややこしくなりそうだ。

「え？ いい、いいよ？？ そんな… 私なんてさ…」

「え？ 七華は可愛いよ？ 私、絶対入学式で一番可愛い子に声かけ
るつて決めてたからさ～！」

「え？ あ、ありがとう、そんなこと言われたの初めてだよ…。」

ゆつちやんがあまりにも真剣に言うので少し照れてしまった。

本当に私は今までそんなこと言われたことが一度もなかつた。

その証拠に、私は過去告白されたことが一度もなかつた。

「ね、紹介してあげるって！あいつ良い奴だよ！眞面目で、彼女も作らなかつた。告白は何回もされたのにね～。」

「そ、そうなの？」

良く見ると、私の指差した『彼』は爽やかでサッパリした感じのモテそうな男の子だつた。

でも、私の好みではない。

「ほら！おいで！！」

「えー？いや、いいよおーー！」

私の抵抗も空しく、私はゆつちやんに『彼』の元へ連れていかれた。

「たくま遅。」

「どうやら彼は『遅』といつが前のようだ。

「お～柚季、同じクラスなんだ、よろしく。ビシタ？」

「よろしく～！友達できた？」

「あ？ああ、少しな。お前は…つてできたみたいだな。」

「彼は私の方をチラシと見てすぐ顔をそらした。

(…反らされた?)

「そう！七華って言つんだあ。可愛いでしょ」

「あ、鈴村七華です。よろしくね？」

「あ…ああ。おつ。俺…紺野遅よろしく」

無愛想の裏側

「ねえ遙。あの男の子と友達になつてよー!」

「あ? どれ?」

「ホラ、あの子!」

ゆつちゃんはさつき指をしていた自分好みの男の子をもう一度指さしていた。

やつぱり、何度見ても普通の男の子だった。

「ああ、アイツね。もう友達になつたよ。」

「ほ、本当! ? さつすが、遙やるねえ!」

「何? 気になるん?」

「うん! カッ! 良くない?」

「男には分かんないけどさあ…。鈴村さんも、アイツ田辺? 「

「え! ? いや、私は…」

突然声をかけられて、声が裏返ってしまった。

そんな私を見て勘違いしたゆつちゃんは満足そうにうなずいていた。

「違うよ、遙。」

「そう。」

次の瞬間、ゆつちゃんが遙君に何か言つたのが見えた。
みるみる遙君の耳が真っ赤になる。

(何を言つたんだろう?)

一通り話終えたのか、ゆつちゃんは遙君から離れてニヤニヤ笑つて
遙君は耳を赤くしたまま席を立つて
ゆつちゃんのお目当ての人の所へ歩いて行つた。

「遙君と、何話してたの?」

「ん? あの人を呼んできてくれたし、お礼になんでもするよつて言つたの!」

何だか腑に落ちなかつたが

遥君がゆつちやんのお田辺の人と一緒にひっかへ來たので
どうやら本当のようだ。

「柚季、連れてきたよ」

「……何？」

ゆつちやんのお田辺の彼は、遠くから見た通り背が高くて
思ったより声が低く無愛想だった。

それでもゆつちやんは頬を少し赤めらせて話しかけた。

「あ、私、西田柚季って言います。で、この子は鈴村七華。友達に
なりたいなーって思って。」

「へ？あ、うん。良いよ」

彼は、さっきまでの無愛想な顔はどうへ行つたのか
とても優しい笑顔で笑つた。

「俺、田中慎^{たなかしん}吾よろしくな」

「あつ！うん！」

その笑顔で、明らかにゆつちやんは骨抜きにされたようだった。
もう、田中がハートにしか見えない。

「七華ちゃんも、よろしくね」

「あつハイ！よろしくお願ひします。」

チラッと遥君の方を見ると、一瞬目があつたけど
やつぱりすぐに田中を反らされてしまい
少しも話しことができなかつた。

「ねつねえ逞君つ私…」

私の言葉は、教室へ入つて来た太田先生の声で搔き消されてしまつた。

「席に着いてー」

先生の声で一斉に皆自分の席に着いた。

私も逞君に話かけたかつたけど仕方なく席に向かつた。

私の席は真ん中の列の後ろから一番目。

ゆつちゃんは私の左隣だつた。

「ねね。逞、どーだつた??」

「えつ。どうつて…あんまり話せなかつたし…。ゆつちゃんは?」

「私は、思つた通り! 慎吾君、本当カッコイイ!!」

「慎吾君、無愛想な人だと思つたけど…違つたね。笑顔が魅力的だつた」

「つでしょー!? ああつ慎吾君の彼女になれたらなあ…。」

「応援するよつ」

ゆつちゃんの視線が、慎吾君の方を向く。

彼女の表情はもう完全に『恋する乙女』になつていて

見てるこつちも思わず優しい顔になるような、素敵な顔だつた。

教卓では私達の担任になつた太田先生が自己紹介していた。

太田先生は背がとても小さいけれど笑顔がキューートな人だつた。話し方も声も上品で、女生徒が憧れる要素がたっぷり詰まつてい

た。
「太田桃杞です。29歳、数学担当です。よろしくね」

二口つと先生が笑うと、男の子たちからちょっとざわつきがあつた。

やつぱり、男の子も憧れるような人なのだろう。

「ね、やつぱ可愛いよね」

ゆつちゃんが、声をひそめて話してきた。

ゆつちゃんは本当に可愛い人が好きなんだ。

「うん。背、小さいけどね」

「でも、あれくらいのが小柄で可愛いマスクットな感じになるからいいんじゃない?」

「やつだね。」

「はい、じゃあ、名簿一番の子から自己紹介して? 女部君。」

やつぱり、新学期の恒例自己紹介はこの高校でも行われているようだ。

私は、自己紹介が苦手だった。

自分にこれといった趣味も特技もないし

そもそも人前に出るのですら嫌いだったのだ。

「はい、じゃあ、次。名簿8番の紺野君。」

逞君が立ちあがつた。

その時、周囲にいた女の子たちのヒンヒン声が聞こえてきた。

「あの人、カッコイイね」

「うん。なんか爽やか」

「え、友達になりたい」

そんな声がする中、ゆつちゃんは一ヤーヤ笑つて逞君を指をじていた。

「あいつ、高校でも人気てるな。頑張つてね、七華。」

どうやら、もう完全にゆつちゃんは私が逞君を好きだと思つているようだった。

私は、カッコイイとは思つけど好きではないのに…。

だけど今さら好きじゃないなんて言つたら、ややこしいことにな

るだろ。」

だから今は訂正しないでおこうと思つた。

(別に、誤解されたままで良いか。好きな人ができたら、新しい
好きな人ができたって言えば良いし。逞君もあんなにモテるんだも
ん、大丈夫だよね)

「え、紺野逞です。演劇部に入ろうと思つてます。よろしく」

「逞、俳優になるのが夢なんだよ。」

「凄いね。夢かあ、私にはないなあ」

「そうなの?」

「うん。」

ゆつちやんは、本物に逞君のことを詳しい。

さつき逞君が赤くなつたのは
もしかしたら逞君がゆつちやんのこと好きだからなのかな?
と、少し思つた。

自己紹介

「じゃあ、次は名簿11番。田中君」

「あっ。慎吾君だ！」

ゆうちゃんは、慎吾君の番になつた途端田の色を変えて慎吾君を見つめた。

(本当に、好きなんだなあ)

「田中慎吾です。演劇部に入ります。よろしく」

「し……慎吾君も演劇部なんだ……。決めた。私も演劇部に入る！ね、七華も一緒に入ろう！」

「え！？あ……で……でも」

「どうかに入る部活決まつてるの？」

「いや……決まってない……けど」

「なら決まり！良いよね？」

「あ、うん……。」

正直、演劇には全く興味がなかつた。

何をするのか、どうにうものなのかも全然分からない。それなのに、良いのだろうか。

迷いはあつた。

だけど、新しいたつた一人の友達の誘いを断れるはずもなく私は演劇部に入部することを決めた。

しばらく、いろいろな人の自己紹介が続く。

私の番が近づくにつれ、私の心臓はバクバクと跳ねる。

(どうしてみんな平気な顔してるのー？)

周りを見ても、隣の友達と笑いながら話したり

ただじつと前を見て座っている子がほとんどだった。

私のように緊張している子は一人も見当たらない。

「じゃあ、次29番の佐々木さん」

私の番は次だつた。

私の緊張は絶頂に達していく

何を言つかも考えていないので頭が真っ白になつた。

佐々木さんの自己紹介の間

クラスの皆や先生は真剣なまなざしで自己紹介を聞いていた。
(そ、そんなに注目されたら…む…無理…どうしよう)

パニックになって周りをキョロキョロしていると、慎吾君と田代が合つた。

慎吾君は私と田代が合つと、私の緊張を感じ取つたのか少し笑つて『頑張れ』と口パクで言つてガツツポーズをしてくれた。

相変わらず彼は、笑顔が魅力的だ。

「はい、じゃあ次は30番。鈴村さん

「は…はい！」

勢いよく立ちあがつたため、イスは大きな音をあげてしまった。危うく倒れるところだったのを、ゆつちゃんが支えてくれた。

「あ…ありがと。」

「緊張すんな～！頑張つて」

「あ…えと。鈴村七華です。あがり症ですが、優しく見守つて下さい。お願いします」

クラス中から笑いがあがつた。

私は何か変なことを言つたのかと、無償に恥ずかしくなつた。それでも、自己紹介は過ぎて行つた

「次は…35番。西田さん」

「はい！西田柚季です！将来の夢は、翻訳家です。よろしくお願い

します！」

ゆうちゃんは、明るく自己紹介をこなした。クラスの印象もよそ
そうだった。

何から何まで、ゆうちゃんは簡単になにか。本当にひときわめっこ。
「ゆうちゃん、良いなあ」

「え？ 何が？」

「明るくて、何でもできる感じ。」

「そんなことないよ？ 私、体育が苦手なの。本当にダメなんだあ……」「私も体育苦手～」

「だよね～」

ゆうちゃんは、自分が明るくて何でもできる」と鼻にかけない。
本当に良い子だった。

(これで少し先走らなかつたら本当に完璧)
よく見ると顔もかなり綺麗だった。

反らされる視線

一通りの自己紹介が終わって、先生が話をしている時ふと慎吾君とまた田が合つた。

慎吾君は今度も口パクで『お疲れ』と言つて笑つてくれた。

慎吾君の笑顔は、安心する。

だから、私も口パクで『ありがと』と返した。

慎吾君が先生の方を向き直つた直後、逞君とも田が合つた。だけど逞君は笑つたり、メッセージを送つてくれる事なくまたすぐに先生の方に向き直つてしまつた。

(どうして、避けられてるんだろう…)

しばらく逞君の横顔を眺めていると、ゆつちやんが私の肩をツンツン叩いて来ていた。

「どうしたの？逞？」

「え？あ、うん。なんかね、田反らされるの」

「逞に？」

「うん…さつきから田が合つただけど、すぐに田反らされちゃって嫌われてるのかなあ？」

「ふうん…逞はピュアだからね。でも、嫌われてはいないと思つよ？」

ゆつちやんの言葉の意味が理解できなまま、その口は過ぎて行つた。

帰りのST(Short Time)が終わると

ゆつちやんは慎吾君と逞君のところへ走つて行つて何か楽しそうに話していた。

一人取り残された私は、大人しく帰る準備をして教室を出ようとしました。

「あー待つて、七華！」

ゆつちやんが急いで私のところへやつてきて、逞君と慎吾君のところへ連れ行つた。

ゆつちやんに連れていかれている間

そんな私たちを何人かの女の子たちが羨ましそうに眺めてくるのが見えた。

どうやら、逞君と慎吾君はもつすでに何人かの女の子の憧れの的らしげ。

少しの優越感と、少しの不安が私の中をよぎる。
(これが原因でいじめられたらどうしよう……。)

「ね、七華。七華も演劇部入るよね?」

「え? !あ…う…うん。他に入る予定もないし…」

「じゃあ決まりだね、今俺と逞と柚季ちゃんで話してたんだがどうぞ、
今から部活見学行かない?」

「あ、部活見学…」

私とゆつちやん、そして慎吾君が話している間

逞君はずっと窓の外を見て不機嫌そうだった。

(やっぱり嫌われてるんじゃないかなあ…)

「忙しい? 七華が忙しいなら明日同じでも良いんだけど」

「え? そんなことないよ! 大丈夫。行こう!」

そうして私たち四人は演劇部が活動している講堂へ行つた。

出会い

講堂へ入ると、何人もの先輩たちが発声練習をしていた。男の先輩も数人いて、その人たちにはいろんなライトの機材のチェックをしている。

(本格的なんだ…大丈夫かなあ)

そう思つていると、一人の顧問であろう先生が私たちのところへ近づいてきた。

「四人は、入部希望か?」

この先生は、入学式で紹介されていた先生だ。と一瞬で分かつた。教務主任の辻村夏樹先生だ。舞台の上では、そんな風には見えなかつたけれど

辻村先生はもの凄い無愛想で、声も低くそつけなかつた。怖い。それが辻村先生の第一印象だった。

「はい、見学しても大丈夫ですか?」

逞君が目を輝かせて辻村先生に話しかけた。

辻村先生は無表情で逞君を見下ろして、一言言つた。

「見学はしても無駄だ。发声練習に加わってみる」

あまりにも上目線な口調に、ゆつちゃんは明らかにムッとしていて慎吾君はそんなゆつちゃんを見て苦笑いしていた。だけど、私は不思議と嫌いになれなかつた。

「いいんですか!?」

逞君はさらに目をキラキラとさせて答えた。

そんな逞君を見て辻村先生は少しだけ笑つて先輩たちに指示を出し歩いて行つた。

「何、あの先生!超上目線じゃない!?」

案の定、ゆつちゃんは相当頭に来ていた。

「柚季、あの人は高校演劇のプロフェッショナルだ。凄い人なんだ

よ！あの人気が、この学校だから、俺はこの高校に入学したんだから。

「そうなの? そんなに偉いだかなんだか知らないけど……やだな。あの人。怖いし、ここは部活。辞めようかなあ

「好きでいいよ。慎吾がどうかね？」

「俺も、辻村先生は尊敬してるんだ。この高校へ来たのは偶然だけ

「あ、私、やります。」

「え、七華もやるなら私もやる~」

ムに個人情報の漏洩が発生したと見ていい

和がち四人は辻村先生のところへ歩いて行く。辻村先生は一通り指示を出し終えたらしく、音郷

いた。

舞台で発表する

「はい」

舞台へ上がるとき、世界が一変する。観客は一人もいないのに、王座を

たくさんのライトが眩しくて、熱くて、だけど興奮する。ワクワ

クする。

全然知らぬ世界を作りあげて、いくんだ。

「声を出せ。あ———で良い。息が続くだけやれ」

卷之三

「…え…あ…あ…あ…」
「…え…あ…あ…あ…」

初めに指名されたのは慎吾君だった。

慎吾君は少し緊張した面持ちで腹に手を当りて腰を出した。

「あ・え・い・う・え・む・あ・お」

「か・け・き・く・け・こ・か・」

「か・け・き・く・け・こ・か・」

「か・け・き・く・け・こ・か・」

「お前は、ちょっと声を出すときに力を入れ過ぎだ。もつとリラ
ックスした方がいい。次、その隣の男子。」

次は逞君だつた。

「あ・え・い・う・え・お・あ・お

「あ・え・い・う・え・お・あ・お

「か・け・き・く・け・こ・か・」

「か・け・き・く・け・こ・か・」

「か・け・き・く・け・こ・か・」

「お前は、声量が若干足りていなが…筋は良い。」

「ありがとうございます！」

逞君は本当にうれしそうな顔をした。

そんな逞君を見て、辻村先生も満足そうになづいて私の方を見

た。

「次、そこの髪の長い女子。」

私だつた。

演劇の魅力

演劇なんて、少しもかじったことはない。興味だつてない。
そんな私が一人みたいにかつこよく出せるわけない。

だけど、とにかく堂々と声を出そうと思つた。

小さい声で話しても、きっと辻村先生は認めてはくれないだろう。
下手でもいい。全然ダメでもいい。大きい声で言おう。

「あ・え・い・う・え・お・あ・お」

「あ・え・い・う・え・お・あ・お・」

「…おい。お前。」

「は…はい」

やつぱりダメだったようだ。

「大声を出せば良い」という問題ではない。腹から声を出せ。その出し方じや、すぐに声が枯れる。もう一度、やってみる。腹を意識するんだ。」

「あ・え・い・う・え・お・あ・お・」

「まだだ、それでもまだ駄目だ。正しい発声は肩は動かない。」

「あ・え・い・う・え・お・あ・お・」

「ダメだ！腹に意識を集中させろ！」

「あ・え・い・う・え・お・あ・お・」

辻村先生は、舞台の上に上がつて私の隣へ来た。

私の隣に立つていたゆつちゃんは、完全に怖がつていて
今にも逃げ出しそうな体制になつていた。

慎吾君も、すごく真顔で怖がつてているように見えた。
だけど、どうしてだろう？私は、全然怖くない。

「腹だ！腹。」

そう言って、辻村先生は私のお腹に強く拳を当てる。

(痛い。)

「痛いが。我慢しろ。俺の手の動きと同時に声を出すんだ。」

辻村先生は、私のお腹を拳で殴つた、それに合わせて私は声を出

す。

じぱらぐその動作を続けたあと、辻村先生の拳は開かれて私のお腹を押した。

「次は自分でやつてみる。」

「あ・え・い・う・え・お・あ・お」

「そうだ！ それだ、良いぞ。お前はよく通る良い声を持つてる。練習次第でグッと上手くなる。頑張れよ」

心がフワッと明るくなつた。つれしくて仕方がない。

ちょっと褒められただけなのに、すぐくうれしかつた。

「あ…ありがとうございます！」

「うん。いい声だ。次、最後の女子。やつてみる」

ゆつちやんは、もう泣きだしそうな顔だった。

それでも辻村先生に見られているので逃げるわけにもいかない。

ちょっと深呼吸をして、お腹に手を当ててゆつちやんは声を出した。

「あ・え・い・う・え・お・あ・お」

「声が小さい。」

「あ・え・い・う・え・お・あ・お」

「まだだ。」

「あ・え・い・う・え・お・あ・お」

「…………まあ良い。」

辻村先生は納得しないまま、舞台を降りた。

そして私たち四人にイスを用意し、ここで医学するよつこまくらひつけた。

ゆつちやんは泣きそうになるのをこらえながら舞台を降つた。

「もう…怖い…よく平氣だつたね、七華」

「え？ うそ。」

「もう…じつひつ…怖い…部活。」

「私はがんばるよ。ゆうちやんも頑張りうつ~。」

「うん……。」

そして、辻村先生の『始め』の合図でこの高校の演劇が始まった。凄かつた。役者皆が輝いていて、声もよく通る。力ツク良かつた。役者の動きを合図に、照明が変わる。音響が変わる。それも絶妙なタイミングで。

内容も、固いだけじゃなく笑いの要素もあって
50分の演技なのに退屈を少しも感じさせなかつた。
演劇を知らない私でも鳥肌が立つた。

これなら、演劇のプロフェッショナルと言われる理由がわかる。

圧倒された。

私は、この瞬間からいとも簡単に
演劇と辻村先生に魅了されていった。

先生の本気

結局、演劇部に入部したのは私・逞君・慎吾君の三人だけだった。ゆつちゃんは辻村先生に対する恐怖心で入部を断念したのだ。

今年演劇部に入部した三人を含めると、部員数は全員合わせて15人。大道具は部員全員で協力して作るため、照明・音響2人ずつで考えるとキャストは11人になる。

部活のミーティングの時、辻村先生は部員名簿を見ながら難しい顔をして言った。

「キャストはせいぜい5、6人で十分」そして名簿から顔をあげ一言、オーディションだな。と付け加えた。

その言葉は私以外の部員を不安にさせたらしく「半分は出られなってこと?」とざわつき始めた。

私は、最初からキャストが演れるとは思っていなかつたので、何も考えずに辻村先生の話に耳を傾けていた。慎吾君もあまり興味はないさそうだ。逞君だけ、一人残念そうな顔をして下を向いていた。

「慎吾君は、キャストやらないの?」

私が「ソッ」と聞くと、慎吾君は笑いながら答えてくれた。

「ああ、俺は照明がやりたいんだ。」言い終わるとすぐに慎吾君は逞君の方を向いて「逞はキャストしかやりたくないらしいけど。」と言った。

私は、ふーんと頷いて、先生の方を向いた。一瞬目があつたような気がしたのだが気のせいだったかもしれない。

「次の大会は7月末にある。」

辻村先生が、この言葉を発した瞬間、部員たちの目付が変わった。みんな、本気なんだ。

「必ず県大へ出場だ。こんなところで躓いていられない。」先生は、

部員全員の意志を確かめるように、みんなの顔を見回した。一通り見たあと、一回頷いてもう一度口を開いた。

「脚本は俺がもう書いた。明日から個別練習に入る。やりたい役を練習しろ。オーディションは一週間後だ。」そして念を押すように「県大出場は最低条件だ。必死でやれ！」と怒鳴った。その声に部員達は、はい！と野球部のような声をあげてミーティングは終わった。

「流石、辻村先生だよな～！明日から練習か～！」ミーティングの最後に配られた台本を熱心に読みながら逞君は喋っていた。誰に話しかけるわけでもなく、だからと言つて独り言ではないような口調だった。

慎吾君は台本をパラパラとめくつて大体の雰囲気をつかんでいた。

慎吾君も逞君も本当に真剣だ。

私も、台本をペラペラとめくる。5人の男女が絡み合いそれぞれ自分の道を見つけて旅立つ過程を描いている。ラストの夕陽をバツクに五人のシルエットが別々に歩いて行く描写が印象的だった。

気遣いのある人

ミーティングのあと、教室へ行くとゆつちゃんが暇そうに私たちのことを見つけていた。

窓が開いているのだろう、教室につけられたカーテンがコラコラと外を眺めるゆつちゃんの頬に触れる。夕陽の光を浴びて、ゆつちゃんはなんだか寂しそうに見えた。

私たちの気配に気づいたのか、ゆつちゃんはさつさまでの寂しそうな顔を一瞬で笑顔に変えた。

「おかえり～！早かつたね。」

「あ、うん。ちょっと話あって、台本配られて終わり。」私が言い終わると、逞君は台本から目を離さずに「明日から本格的に練習が始まるんだ。」と付け加えた。

ゆつちゃんは、へえ…と氣のない返事をして慎吾君に言った。

「ねえ、台本見せて」ゆつちゃんが言葉を発した直後、逞君が慎吾君の台本を取り上げた。

「ダメだよ、柚季は本番までの楽しみ！」

そういう逞君の表情は、本当にキラキラとしていて見ていて微笑ましかった。だけどゆつちゃんはちょっと機嫌を悪くしたらしく、ツーンとまた窓の外に視線を映した。

そんな二人のやりとりを見ている慎吾君は少し気まずそつだった。

私も、なんだか居心地が悪い。

数分間、お互ひ何も話さない時間があった。逞君とゆつちゃん以外は、ほぼ初対面なので仕方ないのかもしれない。だけど、慎吾君はしばらくして口を開いた。

「七華ちゃんは、キャストやりたいの？」

不意打ちだった。あまりにも突然だった為、私は「え！？」と奇声を発してしまった。それが恥ずかしくて、「あ…いや…キャスト

はまだ早いかなって」という返事が小さくなってしまった。

慎吾君は特に気にした様子もなく、そつか。とだけ応えて次はゆつちゃんの方を見た。

「柚季ちゃんは、何部に入ったの?」

ゆつちゃんは、さつきまでのムスッとした表情を変え満面の笑みで答えた。

「合唱部。中学のときも合唱部だったから。」

慎吾君は、本当に気遣いのできる人だった。そんな慎吾君の優しさは、背中がムズムズする位愛おしく感じる。そして、そんな優しさに触れて幸せそうに笑うゆつちゃんも、愛おしく感じる。私は、この一人とは仲良くなれる気がした。

本当は逞君とも仲良くしたいのだけど…どうやら私は本格的に避けられてるみたい。今日一日ずっと顔を反らされてばかりだ。流石に、もう話しかけることもできない私は、ただ戸惑ってしまった。

そんな私たちの関係が変わったのは、その日の帰りだった。

慎吾君のお陰で機嫌を取り戻したゆつちゃんは、やつぱり私が逞君を本当に好きだと思つてるので、やたらと一人を近づけようとした。

ちょっと顔が良いつて言つただけだったのに、と私は気まずさを隠せない。逞君も耳を赤くして目をそらす。怒つているのか、恥ずかしがつていてるのか私には見分けがつかない。

「ねえ、四人でアドレス交換しない?」

慎吾君の提案だ。私は、気まずい雰囲気に耐えられなかつたので慎吾君のこの提案には正直ホッとした。この提案なら、ゆつちゃんは乗つてくるし、気まずさを消すことができる。

チラッと慎吾君の方を見ると、慎吾君は私を見て笑つてくれた。

そこで私は、困つてている私のために提案してくれたんだと分かつた。

本当に気遣いのできる人なのだ。

メール

私は初めに、ゆっちゃんと赤外線でアドレスを交換した。次に慎吾君。そして最後に逞君。

「あの…私、送信するから受信してくれる?」

恐る恐る逞君に声をかけると、逞君は「ああ」と一言だけ返してセンサーの部分を私に向けてきた。私も急いで準備して逞君の携帯のセンサーの部分に、私の携帯を近づけた。

一瞬で送信は完了した。ゆっちゃんも慎吾君も、このあとすぐに電話番号付きのメールをくれたのだが、逞君はくれなかつた。結局、私のアドレスを逞君に教えただけで逞君のアドレスはわからずじまいだつた。

逞君は私とアドレスを交換するのが嫌だつたんじやないかと不安になつた。

家に帰ると、メールが一通来ていた。一通目はゆっちゃん。

件名：ヤバイ！

>本文<

慎吾君、超優しくない！？

最初は顔だけだつたんだけど、今は本気で好きかも！

- E N D -

私は、ちょっとフフッと笑つてすぐに返信した。

件名：良かつたね

>本文<

私も慎吾君、良い人だなあつて思つたよ。
気配り出来る人だよね、頑張つてね！

-END-

次に来ていたメールは慎吾君からのメールだつた。

件名：初メール

>本文<

こんばんわ～。慎吾だよ。

今日帰り、すぐ困つた顔してたけど大丈夫?
逞と何かあつた?

-END-

嬉しかつた。慎吾君になら、なんでも相談できるような気がする。

件名：ありがとー

>本文<

こんばんわ うーん…何かあつたわけじゃないんだけどね?

なんか、逞君に避けられてると思うんだあ…。

慎吾君はどう思つ?

-END-

メールを返したあと、一人からじばらく返事はなかつたので私は
もうひつた台本をもう一度読んだ。

恋の諦め

半分ほど読んだあたりで、私のスライド式携帯の画面が点いた。画面には「受信中」の文字だけが表示されている。誰からか、メールが来たみたいだ。しばらく携帯を眺めていると、受信中の文字は受信完了の文字に変わり、「ゆうちゃん」の名前を表示した。

私は持っていた台本を机に置き、携帯に手を伸ばす。

件名：Re：良かったね

›本文‹

でしょー？惚れちゃダメだよ、七華は遅なんだもんね～。

遅と何かしゃべった？

実は、遅に言ひちやつたんだ 七華が遅のこと気になつてるって！

- END -

本文を読んだ時、ひやっとした。

ゆうちゃんが遅君にそんなことを言つていたなんて…知らなかつた。

私が記憶をたどると、ゆうちゃんが遅君に内緒話をして遅君が赤くなつたのを思い出した。

――あのときだ――

そこで、遅君の態度全てに納得ができた。遅君は入学式のときから私が自分のこと好きだと思つていたのだ。だから…避けた。

もう取り返しがつかない。と思つた。私が今ゆうちゃんに「遅君は顔が好きだっただけだよ」と言つても、遅君自身に誤解されいたらどうしようもない。遅君に「好きじゃないから」というのも…失礼な気がする。どうしたらいいか、わからなくなつた。

しばらへ返事を返せないと、もう一通メールが受信された。

慎吾君だった。

件名・Re :

>本文へ

こんなこと書いて良いか、わかんないんだけど…

逞は七華ちゃんのことを嫌いだから避けてるんじゃないんだよ。逞、気になってるみたい。七華ちゃんのこと。

でも、柚季ちゃんが書いてたけど…

七華ちゃんも逞のこと気になってるんだよね？

-END-

頭の中が真っ白になった。

私は、いつもそうだった。人に流されて今まで生きてきた。初恋の人も、中学時代好きだった先輩も、初めて付き合った彼も…周りに流されてきた結果だ。私は、今まで自分の意志で人を好きになつたことはない。ずっと「あの人、七華の好きそうなタイプ」と言われて好きになってきたのだから。

高校では、ちゃんと自分の意志で好きになりたかったのに…。

後悔が私の胸をふるぐ。もつと早く、ちゃんと書いていたら良かつたのに…。慎吾君にまで誤解されてしまった。それが、一番悲しい。

件名・Re・良かつたね

>本文へ

言っちゃったの…?「うわー恥ずかしいなあ…。
でも、逞君とあまり話したことないから…
なんとも言えないんだよね。

-END-

件名：Re：

>本文へ

うーん。気になつてゐる…のかなあ？

第一印象は、すぐ良かつたけど、
ちやんと話したことないからわからなくなつちやつた。

-END-

こんな状態でも、私はやつぱり周りに流されてしまう。そんな人間なんだ。

私はこのとき、いろんなことを諦めた。

ふと氣づくと、私は何かをふっきったように台本と学校帰りに買った高校演劇入門の本をひたすら読んでいた。

いつも、私はそうなのだ。

人に流され、自分の無力さに氣付くと何かを忘れるために、何かに夢中になる。やうすることで、私は自分への憎しみ、周りへの怒り、将来への絶望感をぬぐいとるのだ。今回は、演劇だった。

辻村先生、そして先輩が作りあげた『演劇』という一つの舞台。部活見学で見た演劇は、本当にすごかつた。眠さも、退屈さも知らない、ただ舞台に夢中になれたあの空間が、今この状態では恋しくてしかたない。私はこの時、私もあるな演劇を作れるようになりたい、あの空間へ行きたい、と心から思ったのだ。

私は、次の日が学校であることも忘れ何度も何度も台本を読んだ。一時間、二時間…気づけば夜中の12時を回っていた。何度も読んで、分かったことがある。

台本自体の内容は、そこまで完成度の高いものではない。ありふれた話題、ありふれた会話。何もかもがありふれている。だけど、何か訴えかけるものがある。ここなのだ。高校演劇に必要なのは。高校生、大人の心に訴えかける「何か」。それを辻村先生はわかっている。

前へ進むことを恐れる男の子。前へ進みたいのにどこへ行けばいいか分からぬ女の子。前へ進むことも後ろへ戻ることもしない立ち止まつた男の子。どこへ進みたいのか、自分で決められない女の子。そして、無理に進んでしまつた男の子。この五人が複雑に絡み合つ。

この台本は前へ進むことはどうこうことなのか。大切なものは何

なのかを心に訴えかける。

私は、演じたいと思った。この「どこへ進みたいのか、自分で決められない女の子」を。この子のセリフに、こんなものがある。
『人に流される事と、人に合わせることは違う。人に合わせることには合わせようという「意志」がある。私は人に合わせられる人間になりたい。』

このセリフで、女の子は初めて自分の意志を見せるのだ。
自分の意志で前へ進み、時に人に合わせ生きていく。それが彼女自身のハッピー・エンド。

私の目指す、そのものだった。

日常の始まり

翌日。夜更かしをしてしまった私は、いつもより30分も遅れて目が覚めた。

慌ててキッチンへ駆け込み、「」飯を食べる。私の両親は幼い頃に離婚してしまったので父親しかいない。母親は、今は仕事で出会った素敵な男性と結婚して幸せな家庭を築いている。

私は、自分の家庭環境に不満を感じたことはない。父も優しく、妹もいるし、母とは月に一度会う機会を作っている。寂しく感じることもあるが、私は私での生活に慣れてしまった。

「七華、夜更かしはよくないぞ」「

父がお皿を洗いながら言った。

「」めんなさい、台本を読んで…。七海は？」

「もう行つたよ。」

「迷子にならないかな？」

「もう中学一年生なんだから大丈夫だろ？。ホラ、七華も時間。」

「あつ行つてくるね！？」

父は、干渉はしない。だけど、ちやんと心配はしてくれる。私も七海も父が大好きだ。

学校に着くと、もうゆつちやんも慎吾君も教室にいて一人で仲良く話していた。そんなところに割りて入るのは気がひけたので、私は何も言わずに席に着こうとした。すると、ゆつちゃんはすぐに私に気付いて「こつちおいでよ」と手招きしてくれた。

「おはよ、七華髪ボサボサだよ」ゆつちゃんが、笑いながら私に櫛

を貸してくれた。慎吾君も「寝坊?」と笑っていた。

「ちょっと、夜更かししちゃつて……」

ゆつちやんに借りた櫛で髪を整えていたり、ゆつちやんが「逞、おはよ」と手を振った。慎吾君もそれにつられて「おす」と手を擧げる。

私も慌てて振り返り、「お、おはよ」と笑う。

逞君は「……おはよ」と無愛想に挨拶をして席に着いた。

逞君の態度の理由を知つてはいても、やっぱり無愛想にされるのは辛いものがある。ちょっとだけ凹んでいると、ゆつちやんと慎吾君が苦笑いしながら私の肩をポンッと呂いて「今度みんなで遊びに行こう」と言つてくれた。

私は、そんな二人の氣づかいに心が温かくなるのを感じて「うん」と頷いた。

授業が始まり、なんとなく時間が過ぎて行く。

辻村先生は三年生の英語の担当なので、私たちのクラスへは来ない。ゆつちやんはそれだけが心配だったようで、時間割表が配られた時とでも安心していた。

逞君はすっかり辻村先生を慕つていてとても残念そうだったけど、慎吾君はあまり興味はないようだつた。

化学の授業中、ゆつちやんが「暇な日いつ?」と書かれた手紙を回してきた。私は先生の日を気にしつつ、手紙に暇な日を書き、先生が黒板に字を書く時を見計らつてゆつちやんに手紙を返す。ゆつちやんは先生の手を気にするのではなくて手紙を開き、また何かを書き始めた。

私が少し心配になつてゆつちやんを見つめていると異様な静けさを感じた。先生が黒板に字を書くのを辞めたのだ。ゆっくりと前に視線を移すと、先生が物凄い目で私とゆつちやんを見ていた……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8563g/>

線香花火のあとで

2010年10月13日17時40分発行